

立教英国学院通信

祝辞

在英国日本国大使館 総領事

今村 朗

早春の良き日である本日、立教英国学院中学部、及び、高等部の皆さんが卒業される運びとなりました。心からお祝い申し上げます。おめでとうございます。そして、お子様の成長を見守り、この日を感慨深く迎えられた保護者の皆様、校長先生はじめ先生方におかれましては、日本とは異なる環境の中、色々な苦労があったことと拝察致します。

本日、大きな節目の日を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

卒業生の皆さん、皆さんが本日こうして卒業されるまでには楽しかったこと、辛かったこと、様々な思い出が残っていると思います。間もなく東日本大震災からちょうど二年になりますが、大変大きな被害を受けた東北の人たちを助ける活動に、イギリスの人々と共に参加した人も多かったのではないかと思います。そのこともあり日本とイギリスの絆は益々強まったと思います。そこで本日は、皆さんに日本とイギリスの交流の歴史の一つのエピソードについてお話ししたいと思います。

皆さんは、今から百五十年前の一八六三年に、「長州ファイブ（または長州五傑）」と呼ばれる五人の長州（今の山口県の一部）の若い武士達がイギリスに留学したことをご存じでしょうか。

その五人とは、みなさんも名前を聞いたことがあると思いますが、初代総理大臣の伊藤博文をはじめ、井上馨、山尾庸三、井上勝、遠藤謹助です。

当時の日本は、依然として、日本人が外国渡航することを許可しておらず、五人は密航により、このロンドンへやってきたのです。

この頃、今のようには交通が発達していなかったもので、船で四ヶ月以上もかけてイギリスに着きま

卒業終業礼拝

3月9日、チャペルにて平成24年度卒業終業礼拝が執り行われ、中学部19名、高等部28名がそれぞれの課程を終え、卒業しました。



第二百六十三号 二〇一三年三月十八日
発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILD FORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

した。もちろん、お客さんとして乗船したわけではなく、船の上でも甲板掃除をさせられる等、困難の連続でした。そこまでして彼らがイギリスに來たのは、当時の日本が外国とどのように係わるべきか、欧米の強国を相手に日本がどうしたら生き残れるか、自分たちは、国のために何をなすべきかと深く考え、そして、強い志を抱いていたからでした。

そして、イギリスに到着した彼らが目にしたのは、蒸気機関車や蒸気船、高い煙突を持った工場等であり、彼らは、さぞ、驚きを覚えたことでしょう。五人は、工場に弟子入りする等、大変な苦勞をしてこのような発展の成果を学び取ろうとしました。五人は、また、貧困等のイギリス社会の影の面にも眼を向け向けたようです。彼らが、こうした困難を乗り越えられたのも、ロンドン大学のウィリアムソン教授が自分の家に五人を家族と同じように暖かく迎え入れてくれたということがあったためです。

その後、日本へ帰国した彼らは、イギリスで学んだ沢山のことを日本に取り入れ、日本の最初の総理大臣となった伊藤博文は、「日本の憲法制定の父」、最初の外務大臣となった井上馨は、「近代日本外交の父」、東京大学工学部の前身を設置した山尾庸三は、「日本の工業の父」、鉄道庁長官となった井上勝は、「日本の鉄道の父」、造船局長となった遠藤謹助は、「近代日本の造船の父」と呼ばれるようになり、それぞれの分野における日本の先駆者として、日本の近代化に大きな足跡を残したのです。

今年、この交流から百五十年を記念して、日英両国において長州五傑に関する様々な記念行事が行われます。是非、皆さんも辛い思いや、困難をものともせず、五人の若者のように世界の優れたものを学びとり、さらにそれを世の中に役立てる、そういう気持ちを持って前に進んでいくください。



目次

	ページ
卒業終業礼拝	1～5
祝辞	1～3
卒業生スピーチ	3～4
3学期の行事	2
退任された先生方	4
香蘭女学校との連携	5
DVD コーナー	5
アウティング	6～7
英語科社会科プログラム	6
2012年ケンブリッジ大学 サイエンスワークショップ	7
交換留学プログラム	8～10
ジャケットポテト	10
合唱コンクール	11
第8回 チャプレンより	12

皆さんが、五人と同じようにこのイギリスの地にある立教英国学院で学んだことを、いつまでも大切に、これからの歩む道に生かして欲しいと願いつつ、立教英国学院卒業終業礼拝に寄せる私の祝辞とさせていただきます。

立教英国学院理事

アシユフオード法律事務所パートナー

弁護士 中田 浩一郎

二〇一三年三月九日(土)に行われた二〇一二年度立教英国学院卒業終業礼拝における私の来賓祝辞に関して、棟近稔校長先生より次号の学院通信のために要約を作成して欲しいとの依頼がありましたので、以下のとおり要約を申し上げます。

1. まず、卒業生、在校生、先生方、卒業生の保護者の皆さま、その他ご来賓の皆様に、お忙しい中、卒業終業礼拝にご出席いただいたことへのお礼、卒業終業礼拝への祝辞と感謝の気持ちを申し上げます。その中でも、特に保護者の皆様に対して、長年の責任を

果たされたことに対する感謝とお礼の気持ちをお伝えしました。私も、二人の娘を持つ父親として、それらのお気持ちを心から理解することができたからです。

2. 私は、英国立教学院の理事であると同時に弁護士であるので、法律家というプロフェッションの視点から、卒業生の皆さまになにかに残るお話しをして差し上げたいと思います。以下のようないくつかの法律的なエピソードをお話ししました。

(1) ハムラビ法典について

この法典は、メソポタミア文明の繁栄の中で生み出された世界最古の法典のひとつであると言われています。応報刑主義を明確に記載した法典として有名であり、「目には目を、歯には歯を」という法格言で知られています。しかしながら、この法格言は、世間では、しばしば間違っただけでいる傾向があると思います。この法格言は、目を奪われたら、目を奪い返して良い、歯を奪われたら、歯を奪い返して良いというような復讐を容認するような法格言として理解されていることがあります。それは間違いです。この法格言は、実は私たちが法律家にとっては、世界で始めて「罪刑法定主義」というものを明確に定めた法典として有名であり、「人の目を奪った罪人に対してその罪人の目を奪うこと以上の刑罰を課してはいけない、人の歯を奪った罪人からその人の歯を奪うこと以上の刑罰を課してはいけない」という法原則として知られています。これは、パリのルーブル博物館に行くと、本物を見ることができま

(2) モーゼの十戒について

これは聖書の「出エジプト記」の中のひとつのエピソードとして有名だと思いますが、モーゼは、神との間に十の約束を交わしたと言われていますが、私たち法律家にとっては、西洋社会における「契約」とい

うものの重要性を理解する手がかりとなる、とても重要なエピソードなのです。

(3) マグナカルタ(大憲章)について

これは、一二一五年に英国において、民衆が始めて国王に一定の民衆の権利というものを認めさせた憲章として有名です。それ以前の民衆は、国王の所有物のようなものであり、国王の意のまま支配される傾向がありました。マグナカルタはこのような王の支配の在り方に民衆が始めて異議を唱え、「法の支配」というものを国王に認めさせ、国王と民衆の間に契約を成立させた記念碑として有名です。この年号を覚える時は、「人に以後(一二一五)示す大憲章」と覚えると覚えやすいと思います。マグナカルタは、英国図書館(British Library)で、その原本を見ることが出来ます。ぜひ一度ご覧になって見てくださ

(4) 電気は「財物」として窃盗の対象になるか?

これは、日本で実際に起こった事件です。日本に電気というものが普及し始めたて間もないころ、隣人の電気コードに、自分の家の電気コードを繋いで、無断で電気を使用した人がおりました。これは窃盗になるか?ということが裁判で争われました。なぜならば、窃盗は、「財物」=「物」を盗んだ人に成立する犯罪であり、「電気」は果たして「物」と言えるか?ということが法的な問題になったからです。常識的に考えれば、やはり人の物を無断で使用したのだから、「窃盗」を認めて良いような気がします。しかしながら、一方で、これを安易に認めてしまうと、法の裁きというものが恣意に流れて、前述のハムラビ法典のところで申し上げた「罪刑法定主義」というものを蔑ろにすることにもなりかねないのです。この事件では、裁判所は、最終的に「財物」とであると解釈をして窃盗の成立を認めました。「罪刑法定主義」というものが軽視されると、人類が歴史上に犯した重大な過ちである「魔女狩り」や「ユダヤ人

【3学期の行事】

1月12日	生徒帰寮
1月13日	始業礼拝
1月14日	高等部実力テスト
1月20日	大学センター試験[英語]を全校で実施
1月26~27日	英語検定一次試験(2級以下は本校で実施)
1月26日~2月2日	Millais School からの交換留学生滞在
1月26日	全校新春かるた大会
1月27日	合唱コンクール
2月2~5日	ブレイク
2月2~3日	チチェスター音楽祭
2月4日	アウティング

2月5日	生徒会役員選挙
2月5~9日	Wolverhampton School からの交換留学生滞在
2月10日	第66回漢字書き取りコンクール
2月16日	ギター部コンサート
2月17日	TOEIC・TOEIC Bridgeの資格試験
2月24日	英語検定二次試験
2月27~3月3日	期末考査
3月9日	卒業終業礼拝、生徒帰宅
3月9~16日	ホームステイ
	・Millais School 短期交換留学
3月11~15日	高等部2年生補習

狩り」のような悲しい事件が起きる可能性があるので。ピクトル・ユーゴの「レ・ミゼラブル」という小説や劇もこのようなテーマを扱った物語であり、飢えてたつたひとつのパンを盗んだ少年が一生その罪を負って生きなければならなかった悲劇を扱っています。この有名な劇は、現在ロンドンのピカデリーの近くの劇場で、ミュージカルとしてみるができます。ぜひご覧になってみて下さい。

3. 渡辺洋三著「法というものの考え方」
私は、この本を読んで弁護士になることを志したとも言える、私の人生にとっては、記念碑とも言える本です。岩波新書で読むことができます。「法律は社会を明確に規律しなければ社会正義を守ることができない。しかしながら、同時に、社会の常識に適ったものでなければ人々の幸せを守ることができない。時に、このような二律背反の使命を負っている。」と言っています。これを法律用語では、「法律的な安定性」と「具体的な妥当性」の調和点を探す作業と言います。このような調和点を探すことができる能力を「リーガル・マインド」と言い、法律家にとって大切な能力です。良い本だと思います。一度読んでみてください。

4. 最後に、なにか人の役に立つようなことをしないと社会の一員として生きていくことは難しいと思います。どのような職業でも良いと思います。皆さんが、ご自分の好きな仕事を通じて社会に貢献できるような人になることを祈念して私の祝辞を終わります。皆さんが幸せになれるように。そして、世界の人々が幸せになれるように。皆で協力をして生きていきましょう。ご卒業おめでとうございます。

卒業生スピーチ

中三 松田 祐理子

私は中学二年生からこの立教英国学院にいます。その立教生活の中で、学んだものや印象深かったことはたくさんありますが、その中で最も自分の中で大きかったものをこれからお話ししたいと思います。

私はヴァイオリンを四歳から習い、ヴァイオリンの音がとても好きで、小学校の頃は、一日三〜四時間弾いていたし、休みの日は一日中弾きました。しかし、中学校に入ってから、学校に通うまでの往復に時間を取られ、練習する時間が少なくなっていました。いつしか、楽しかったはずのヴァイオリンが、「やらなければ」という気持ちに駆られるようになり、ヴァイオリンを弾くことが段々楽しくなくなっていました。

そんな時、父の紹介でロンドンにあるギルドホール大学でヴァイオリンを教える

ていらつしやる藤田先生の演奏を聞きました。藤田先生の踊っているような鮮やかな音で、とても楽しく弾いてらつしやった姿に、当時の私は衝撃を受けました。ヴァイオリンを弾くことに行き詰まっていた私は、藤田先生のように弾きたい、藤田先生にヴァイオリンを習いたいと思うようになりました。そんな時にイギリスに行きたいと思いました。そんな時に立教英国学院のことを知り、この学校を志望しました。これが私がこの立教英国学院に来た大きな理由の一つです。

立教でのヴァイオリンの練習は、今までの練習と全く違いました。まず、ヴァイオリンひとつ弾くのにも、先生からヴァイオリンを出してきてもらい、鍵を貸してもらわなくては行けません。また、練習する部屋にしても、私はいつも同じ部屋を使っていたので、先輩方や後輩や友達に迷惑をかけてしまいました。

これらのことを通して、私は「一人だけでヴァイオリンをやっているのではない」ということに気付きました。日本にいた時は、一人で何も考えずにただヴァイオリンを弾いているだけでした。しかし、この立教での練習から、先生方や友達の支えがあつて初めて自分がヴァイオリンを弾け、練習ができる、ということを感じました。そして、私は自分のことばかり考えてヴァイオリンを弾くのではなく、支えてくれた人や演奏を聴いて下さる人のことを考えて弾くようになりました。「こういう風に弾いたらどうだろう」など、弾く曲に対して、どんなアイデアが浮かんでくるか、弾くことがまた楽しくなっていくのを感じました。

スクールコンサートや周年記念コンサートでは、そうやって練習してきた曲を思い切り弾くことができました。弾く機会をたくさん与えて下さったことは本当に嬉しく、毎学期、何らかのコンサートを目標に練習しました。コンサート本番は緊張しますが、「間



違えたらどうしよう」ということよりも、「どう感じてるのかな」と思っているながら弾くことが楽しくなっている自分がいました。そうして演奏し終わった後の友達や先輩・後輩、先生方やお客様からの拍手と笑顔は一生忘れられない私の宝物となっています。心からヴァイオリンをやった良かったと思いました。

この二年間の立教生活で、私はヴァイオリンは一人で弾くのではなく、みんながいるからこそ演奏できるものであることを学びました。私に、そんなとても大切なことを気付かせ、そして受け入れてくれた友達、先生方、今まで本当にありがとうございました。私は四月から音楽学校に行きます。立教で学んだことや思い出を胸に、これからも精一杯進んでいきたいと思っています。

二年間、本当にありがとうございました。これでスピーチを終わります。聴いて下さってありがとうございました。



Graduation Speech

高3 福谷 なつみ

Honestly, I can't believe I am giving a speech and about to leave England. My days in this school past so quickly.

During all those years, I focused on my English and ended up with high score in English certification and getting enrollment from the university I really wanted to go. Behind those achievements, there are many people I would like to express my gratitude. In fact, I couldn't thank enough how they have supported me. One teacher taught me with my speed so that I could understand better although it took a long time. Other teacher helped finding my weak point together. My EC and private lesson teachers try fulfilling what I want to achieve.

It was not only teachers who have aided me. There were always cleaning ladies and stuffs who encouraged me to speak in English in a small time.

As you know I quit this school once to challenge my English out side the Japanese community. To my surprise, despite the hard work, my English was not enough level to keep up with native people in American school.

I still remember how scary it was to hear 'What?' from my classmates. It didn't sound nice. I often vexed with my optimistic decision to enter the American school. Nevertheless, I am sure every Tom, Dick and Harry feel same way, Rikkyo school taught me about patience really well so I was able to reach my current level. What is more, after I left England, my best British friend and my host family never quit getting touch with me. Looking at those letters from them, I couldn't just give up and return to this school. Literally, they saved my life. They are like a trigger to me. To tell the truth, I have become more

ambitious since the day we have met. In the last part of my speech, I want to say to all of you something. If you want to do something, you are already in a good environment although it is hard to see. It is up to you. More you wish, more you get your help as long as you are student. Once we step out from our protection, such as school, there is a global competition waiting for us and it is a cruel world. Basically nobody wait for you. Somebody aims to defeat you. Perhaps you are the one who need to adjust to the environment and set your wheels in motion. So Safe Journey is my last word to leave.



退任された先生方

今年、4 名の方が退任されました。
左から高野晃一チャプレン(10 年勤続)、金子裕美先生(保健体育 4 年勤続)、梶原有希子先生(社会 3 年勤続)、山口千尋先生(国語 1 年勤続)。
ありがとうございました。

香蘭女学校との連携

2011年度より始まった香蘭女学校との教育連携。「キリスト教に基づく人間教育」という建学の理念を共有し、同じ立教大学の系属校である香蘭女学校からは、中学3年～高校1年の間に1年または2年間、本校へ「留学」することができる制度があります。

今年度末は、中学3年から2年間を立教英国学院で生活した生徒、及び高校1年からの1年間を日本に一度も帰国することなくイギリスで過ごした生徒、の2名が帰国することとなりました。



経験

私は一年間をイギリスで過ごした。休みの期間も帰らず語学学校に通った。もちろん最初は英語力を伸ばしたいという狙いで行ったつもりだったが、ここに来て気付かされた事や学んだ事は本当にたくさんあった。

語学学校で過ごした日々。夏休み、初めて行った場所。周りに日本人はいない。日本語を使わない毎日を送っていた違和感だらけだった上に、英会話も上手くなく中々自分から話しかけられない自信の無い自分がいた。それでも日本に興味を持って話しかけてくれる人がいて救われた。こうして私は打ち解けていった。あらゆる面において初めて尽くしの経験を得た場所で学んだもう一つの事は「伝える事の大切さ」である。異国の人と話す時、上手くなくても良いからとにかく積極的に意見を述べる事が大切だと思った。言われてみたら当然かもしれないが、これが無いと世界ではきっと通用しないだろう。私はこの力をつけ、精神的にも強くなったと思う。

家族から離れて一人でいた事で私はこの先何がしたいかをしっかり考えられた。だからこれからはその目標に向かって頑張りたい。

そして今は自分を変える機会をくれた私に携わった全ての人達に感謝します。

高 1-1 岩崎 華乃

経験の与えてくれたもの

私がこの学校で学んだことは数え切れないほどたくさんあります。本来なら日本から遠く離れたこの地にわざわざ来たのだから、一番に英語力やイギリス文化を上げるべきなのかもしれませんが、それら一般的なことよりも、この寮という特殊な環境で数々の行事を通して学んだことを挙げたいと思います。

入りたての一年目は、何をしたら良いのか分からず見様見真似で過ごすうちに、あっという間に一年が過ぎていました。二年目になり少し余裕が来ると、今の自分に出来る精一杯のことをしたいと思うようになっていました。そんな気持ちが生まれたのは、生徒のことを常に考え温かく見守って下さる先生方がいたからこそだと思います。

そうやって一つ一つの行事を終える度に、一人一人が与えられた役割を担う大切さや、協力して一つのものを作り上げる大変さと、終わった後の充実感、そして生徒だけでなく保護者の方やお客様が皆で支え合って成り立っていることを教えられました。

また、多くの行事をこなしながら送る毎日の生活は、色々な遠回りや迷い、忙しさに嫌気がさすこともありましたが、

「忙しいほうが、退屈なのよりよっぽど良い。」と励ましてくれる先生や、話を聞いてくれたり、手を差し伸べてくれる友達との出会いは私にとって、とても大きな力となりました。そうして、辛い時も周りの人達からの助けを借りて乗り越えていくうちに、自分の捉え方を変えるだけで、状況が一気に好転することを知ったと同時に、プラスの方向に考えて生活をしていると自分に自信もつきました。また、何か失敗しても次に活かせば無駄な経験なんかじゃないとも思えるようになり、そうやって失敗してでも挑戦をした時の経験は大切な思い出として残っています。

これからも、自分の限界を自分で決めずに積極的に行動して、より良い自分を作っていきたいと思います。

高 1-1 川崎 真実

DVD コーナー

生徒会による新しい企画として、教員室入り口に DVD 貸出コーナーができました。息抜きに映画でも観ようかなという時に誰でも DVD を借りることができます。皆で持ち寄って、現在既に約 70 本の DVD が揃っています。



ロンドンへちょっとお出かけ

アウトティング

毎3学期は全校生徒でロンドンへ外出します。小中学生はグリニッジ天文台へ、高1はナショナルギャラリー、高2はロンドンのミュージアムへ行き、充実した1日を過ごしました。



その発想はなかった

中三 小林 裕季久

人間、やろうと思えば案外何でもできるのかもしれない。ヒトラーがドイツという国をまとめ上げたように。人類が核兵器を開発したように。でもこんな黒い例ばかりではなく、テレビとかパソコンとかは今や全世界で使われている発明だし、人間は良いことも悪いこともできるのかもしれない。でも、彼らを見た時にこう思った。「その発想はなかったわ。」

彼ら、STOMPは異色のパカッションショーである。その理由は、まるで楽器を使わないからである。もつと日常的にあるもの。例えば、バケツやら缶やらを叩いて遊んだ経験がある人もいるだろう。だが、彼らは弾けた。マッチ箱にライター、あぐくの果てに買い物カートまで鳴らし始めた。

発想が違う。

頭の構造が違うのだろうか。この時私は、やってできないことはないと感じた。

彼らの演奏している姿は、シェールでありながらも、観客に物言わせない迫力と情熱があった。デッキブラシを用いたパフォーマンスの時は、二、三本くらい折れても平気で続けていた。自分は今、ギターのプライベートルェッスンを受けているが、楽器が全体的にかすんで見えてしまった。あれだけのものを楽器で出すのは難しいだろう。

ショーが終わる頃には劇場は観客も手拍子で参加する形になっていた。おかげで帰るまで手が少しヒリヒリしていた。

久々に充実した日を過ごしたように思う。イギリスに来たことを誇りに思う私なのだった。



外に飛び出せ

英語と社会の フィールドワーク

2011年から始まった中1～2の英社のフィールドワーク。授業で生徒たちを地元の町へ連れ出すという新しいプロジェクトでした。とにかく「イギリス」に触れようということで、地図作りや建物のスケッチから始めて、更に道ゆく人々へのインタビューを開始。入学した頃はおぼつかなかった英語が、積極的に会話し、様々な英国を知る中学生へと成長しました。この3学期で2年のワークを終え、中3になった初夏からはいよいよG.C.S.E.学習です。

〈この2年間のフィールドワークの取り組み〉

～英語科～

- ・英国の建物を描きとろう
- ・まず質問1つ 街の人に話しかけよう
- ・街の人にアンケート、立教知ってますか？
- ・道ゆく人30人に話しかけよう
- ・お店の人にインタビュー

～社会科～

- ・地元ホーシャムを歩いて街マップづくり
- ・英国の18-19世紀農村ワーク
- ・克蘭レー教会を探検
- ・ナショナルトラスト管理のお屋敷訪問
- ・どうして値段が違うの？価格調査隊！





写真

目移り

高一——畑田 夏実

名作の数々が澄まして鎮座する天下の美術館で、きよろきよろするのは山出しの子みたいで田舎臭くて恥ずかしい、なんて思いながらも自制できなかった。これが、アウティングで行ったナショナル・ギャラリーについての率直な感想だ。

一月に現代文の授業で『失われた両腕』という論説を読んだ。「ミロのヴィーナス」が世界的に「美」として認められ、もてはやされるのは、その両腕がないためだ、というのが筆者の持論であった。美とは作り上げた直後の状態ではなく、作者の意図せぬ破損や劣化を含めて美というのだそうだ。確かに、ナショナル・ギャラリーに限らずどの美術館にある絵も、全てが全て、発表時に良い評価を受けたものではない。それこそ、作者の死後何十年も経ってからようやく評価され始めた作品もある。美術館はそんな、いわば「ミロのヴィーナスの集合体」であり、人々が「世界の美」と言った作品が、所狭しと並んでいるのだ。

そんなだから、部屋から部屋に移動する時でさえ、目が絵画を探す。二時間で見切れる代物ではないので、課題で要チェックと言われている作品を最優先に見るつもりが、道々で気になる絵を目ざとく見つけた私の両眼は、そこで止まることを要求した。日本では決

してお目に掛かることのない隠れた名画を、少しでも焼き付けておきたかったからだ。時間が少ないことからくる焦りも手伝って、私は少し混乱していた。絵を見て感動しても、その余韻をかみしめる間もなく、隣の絵に対する感嘆が押し寄せてくる。優秀つけがたく、感動が上書き保存されていくような気分だ。言いようにって、これは目移りだろうか。

しかし私は、断じて目移りではないと言いたい。私の性癖ではない。私の頭のせいではない。冷めにくくとも熱しやういタイプではないのだから、こんな作品たちを住まわせているナショナル・ギャラリーがいけないのだ。そう思いたい。初対面の名画たちに少ない時間で挨拶していくのは当然大変だし、優秀はつけがたいし、きよろきよろして当然だ。私は悪くない。

けれど、やはり次に行く機会があれば、少しは慣れして、「目移り」もしないだろう。そんなことを少し考えて、ふと気付いた。そうか、ナショナル・ギャラリーは私をリピーターにする気なのだ。今度訪れる時は、もつとゆったり、じっくり、田舎っぽさも消えて、名画と対話できるだろう。焦った眼も落ち着いて彼らを見据えてくれるに違いない。

2012年 ケンブリッジ大学サイエンスワークショップ

2012年7月、ケンブリッジ大学での3回目のサイエンスワークショップが日英高校生のために開催された。本年は京都滋賀スーパーサイエンススクールと英国現地校からの高校生に加えて、東北被災地から4校の16名の生徒教員が特別招待された。本校より3名の高等部2年生が参加し、本校で開催されたプレワークショップの準備、運営に積極的な貢献をした。ケンブリッジ大学でも、工学部、キャベンディッシュ研究所、環境中の放射線のそれぞれのグループでケンブリッジで活躍する科学者、研究者から直接指導を受けることができ、将来のサイエンティストとして貴重な体験をした。

今夏のサイエンスワークショップは科学実験の体験だけでなく、東北被災地域の震災後の状況の報告、一般市民の放射能、原子力発電に関するアンケート調査の報告等、震災後の日本が抱える問題について、日英の高校生が意見を述べ合う機会も設定された。社会と科学との関連を大切にしたいと考える主催者として非常に有意義なワークショップであったと思う。

2013年夏は、再びケンブリッジ大学で東北被災地域を代表し、福島県、宮城県の高校生を招待する予定であり、京都大学においても2回目のワークショップの開催が予定されている。更に、2014年には英国人高校生が東北の地を訪れるサイエンスワークショップの開催準備が始まっている。



日常生活という国際交流

中三 藤 裕佳

私は今回、立教英国学院とミレスクールで行われた第一回目の交換留学に参加しました。今回の交換留学ではミレスクールの子たちが立教に来て、一週間共に生活しました。

平日には、私たちが普段受けている授業と一緒に受けました。GCSEでは分からないところを教えてもらったりしました。日本語で受ける公民や数学の授業では、授業の内容を英語に訳して説明しました。普段、授業を英語で訳すことがないので、とても難しかったです。ペアの子が私のぎこちない英語の説明を真剣に聞いてくれて、内容がちゃんと相手に伝わった時はとても嬉しかったです。

授業の無い日曜日には、日本の伝統文化である茶道や着物の着付けをして日本の文化に触れてもらいました。みんな日本の文化に興味津々でした。初めての着物を着て、嬉しそうにはしゃぐ彼女達を見て、何だか私も嬉しくなりました。国際化が進むこの時代だからこそ、自国の文化を学ぶことは大切なのだと良く耳にしますが、今回それを身を持って実感することができたと思います。

最初はお互い緊張でぎこちなかったのに、すぐに打ち解けて仲良くなることが出来ました。別れる日の朝は、ペアの子の顔を見ただけで、涙が出て来てしまいました。ミレスクールの子たちと過ごした一週間は毎日が楽しくて、笑顔が絶えないとても充実した日々でした。

今回の交換留学では去年のハーフタームにしたホームステイの時よりも、多くのことを相手に伝えることが出来

るようになったと実感

英国と日本の文化体験！

交換留学プログラム



ました。それでも、相手が何を言っているのか良く分からずに、相づちを打つだけのこともあったので、

もっともつと英語を勉強したい

と思いました。

三月にミレスクールでまたエイミーに会うのが楽しみです。

日常生活という国際交流

高一― 山本 まゆ

「本からはいつでも学べるけど、実践できる機会は滅多にない。」私のバディが言ったことをざっと訳すとこんな感じだ。全くその通りである。学んできた知識を存分に活かして、母国語を達する留学生の彼女らと過ごして、強く思った。

とにかく機会が欲しかった。冬休みから長く期待を寄せていた私は、この交換留学の参加者に選ばれて、とても嬉しかった。私達の相手より先に来たミレスクールの生徒と食事をした時には、少し不安も覚えたけれど、ウルバーハンプトンの「奴ら」は、それを初日から吹き飛ばした。日本語を積極的に話しかけてきて、こちらも負けじと英語を駆使する。そんな愉快な攻防戦がすぐに幕を開けたのだった。

彼女たちとの出会いから、五日間という時間は飛ぶように過ぎていった。そのドラマの授業と一緒にやったあとに、生物の時間に二人で眠りかけ、

日本史では専門用語抜きで日本文化を必死で伝え、太宰治を授業と同時進行で教えてあげたときには、流石に疲れた。けれど、やれば出来るじゃない。太宰を説明できるぐらい、英語に慣れたのだと、自分に驚いた。勢い良く流れていく時間の中でも、私たちは沢山、小さな進歩と発見をしていた。

冒頭に述べたように、語学において実践経験を積むというのは、とても大きなことである。だから、日本のことを教えたり、授業をともに受けたりしたことが、とにかく自然に話して、一緒に生活したのが、全てにおいて有意義なことだった。同じテーブルで食事して、廊下を並んで歩いて、最後はただ集まって笑った。そんな日常的な国際交流を経たからこそ、今私はこの交換留学に携われて良かったと、心から感じている。

夏に初めてのホームステイをしたときにも、同じ様に英国人と「日常」を共に過ごして、同様の感動を覚えた。そして自分からチャンスに飛び付こうと心に決めた。その決意が、今の私に生きていた。自分で希望し、交換留学に参加した。チャンスを掴んだ私は、以前よりずっと、自分に自信がある。

私は、英語を、話せる。

次の夏、今度は彼女たちの「日常」に、私たちが「外国人」として入り込む。また彼女たちに会うのが楽しみで、新しい経験をするのが待ち遠しい。この機会に得た感覚と自信をなくさず、再び会う日まで、まだまだ自分の能力を伸ばしたいと思う。



The short-time exchange with Millais school

M3 Risa Suzuki

I participated in the first short-time exchange between Rikkyo School and Millais School.

The reason why I wanted to take part in this exchange was not only because my parents told me to do so but also because I thought it would be a nice experience which is different from summer schools. The thought to be able to go to an English school and speaking English with native people at my age was very attracting me because not everyone has the chance to do so. When I was told that I could participate in this exchange I was very happy about it but I also felt a little bit unsure if my English was good enough to communicate with the exchange partners.

On Saturday the 26th January after lunch, however, 5 students including me who took part in this exchange went as soon as they could to the teacher's room to welcome the Millais students. After waiting nervously for a little while the 5 students arrived at our school at quarter to 2 pm. We introduced ourselves and the short-time

exchange started. On the first day we spent most of the time together in the common room of the girl's dormitory or New Hall.

The following week passed very fast.

On Sunday we watched "Sado", which is the traditional tea ceremony. After that our exchange partners had the great chance to wear Kimonos and Yukatas which are the traditional clothes of Japan. We took a lot of pictures and all of the Millais students looked very beautiful. On Monday we had lessons with our buddies. It was very difficult to explain the content of the Japanese lessons in English. Unfortunately on Tuesday my buddy became sick, I felt very sorry about that. But on Wednesday she felt better again so we joined the cooking club and made Onigiris (rice balls) and Miso soup which was very delicious. Regrettably on Thursday I have been to a Volleyball match so I couldn't go with our buddies but it seemed like they had enjoyed themselves at Kendo. At the penultimate day we had fun in Friday sports. We did Budo and learned some self-defense tricks. And on the very last day we

現地校の生徒たちと約1週間にわたりお互いの文化に触れ合う、交換留学プログラム。今学期はミレスクールとウォルバーハンプトンの2校の学校から生徒を迎え、留学体験が始まりました。滞在中はBuddyとペアを組んで、学校生活を共にします。

彼女らは第2外国語として日本語を習っているため、お互いに相手の言語・文化を学ぶ事に積極的。様々な日本文化に驚きながらも、短い1週間を存分に楽しんでいったようです。

春休み最初の1週間、今度は本校の生徒がミレスクールに留学体験をします。どんな経験をしてくるのでしょうか。

took some pictures and we had to say goodbye to each other.

Right now I am looking forward to see my buddy again in March.

MILLAIS STUDENT EXCHANGE PROGRAMME OF EVENTS

Sun 26th Jan

Meet your partner

Sun 27th

Be dressed in a Kimono & Take part in a Tea ceremony(Sado)

Mon 28th ~ Tue 29th

Shadow your partner

Wed 30th

- Help in our English drama Class
- Learn how to cook onigiri(rice dish)
- Give your talk in English

Thu 31st

- Watching volleyball match
- Give your talk in Japanese

Fri 1st Feb

- Take part in Budo (Friday Sports)
- Origami & Calligraphy

Sat 2nd

Take part in activity of primary & middle School

写真

写真

From Amy Knight

Please could we stay here again! It was really interesting to learn about Japanese culture and schools, and I have never met people who are as nice as Rikkyo students. Thank you so much for giving us the opportunity to take part in this exchange.



From: Lauren Lismer(mire)

Please invite us to stay with you again! I really enjoyed my stay here and I am very sad to leave. I feel like my Japanese has improved a lot and I've learnt about your Japanese culture. Thank you very much for this opportunity and hope we see you again.



From Jessica

Loved every minute of my stay here, I want to live here! Everybody was very friendly and hospital and I felt very welcomed. I have learnt so much about Japanese and Japanese culture. I have made some great friends and will miss them very much, and everyone else in the school. Our stay here couldn't have been better. Thank you for having us!

From Rhiannon

I think Rikkyo School is wonderful place. The students are helpful, kind and diligent, while the lessons are engaging and fun. Everyone at the school has been so hospitable after just a few days I feel that I am part of the family! I feel that my Japanese has really improved, but communication has never been difficult because everyone speaks English very well. I wish we could stay longer and I hope I can return one day!

THANK YOU!(ありがとうございます)

ジャケットポットとチャツネ

写真

立教生が「もう一生分食べた!」というくらい、英国料理(ヨーロッパ料理というべきか)に多いジャガイモ。ごはんと食べる日本の食事のごとく、付け合わせで登場します。ポテトの調理法も様々ですが、メインで登場するジャガイモ調理法がジャケットポットです。大きめのジャガイモをオーブンでじっくり焼いて(甘みが増すのだそう)、十字に切り開いたホクホクの芋に、刻んで炒めたベーコンやコーン、チーズなどをとりりとかけていただきます。英国風に特に使うのが、チャツネ。インドから伝わったもので、小さく刻んだ野菜・果物を煮て味付けてあります。外見にちょっとひるんでしまいましたが、酢の酸味が効いて、チーズと一緒にサンドイッチに挟んでもおいしい。マンゴーのチャツネ、リンゴのチャツネなどもあり、果物のものはお勧めです。卒業生にとっては、アップル克蘭ブルと共に、懐かしく思い出す味ではないでしょうか? 苦手だった方もあるかもしれませんね。



合唱コンクール

高一 金子 結衣

おそらく一番最初に練習を始めたのは、高一〜二だろう。でも私はあまり乗り気ではなかった。中学三年間、合唱コンクールをやってきた。毎年、大きなホールを貸し切って、優勝したクラスにはトロフィーが贈られるというとても大きなイベントだった。生徒たちは、七月の本番に向けて、五月の終わりにもう歌の練習をしていた。少なくとも、練習期間は一月以上あったのだ。合唱コンクールはそうやって前々から準備してクラスをひとつにしていくものだと思っていた。だから、練習期間が二週間だと知ったとき、正直無理だと思った。たった二週間で何をどうしろと言うのかと合唱をなめているとさえ感じた。この思いから私は士気が下がってしまった。どうせ良いものなんて出来るはずがないと思ってしまったのだ。でも合唱は好きだから練習にはいつも参加していたし、積極的に歌った。でも心のどこかで本気になりきれない自分がいた。そんな自分に気づきながらも、見て見ぬふりをしていた。クラス全体も、いまいち上がりきれてないのか、パートリーダー達だけが一生懸命な時もあった。しかし本番の日は一刻と迫っている。ほら、やっぱり二週間じゃ無理だよ、とか思いながらも、必死で練習を繰り返した。そのうちに、

「ここ、もう一回歌ってもらえる？」とか、

「音程これで良い？強弱は？これどういう感じだっけ？」

と、いつの間にか燃えている自分。練習を始めて四日後ぐらいには、あのネガティブだった自分がきれいさっぱり、心の中から消えていた。しかし、というか案の定、全て順調という訳にはいかなかった。

本番三日前、それまで出来ていた事が出

生徒会新企画！

合唱コンクール

旧生徒会役員の「全校で合唱コンクールをしよう！」で始まった、第一回合唱コンクール。初めての合唱コンクールは大成。来年はどんなものになるのか楽しみです。

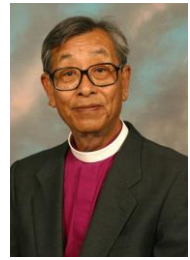
来なくなり、集中力が欠け、クラス全体が中絶みしているとの報告がパートリーダーからなされ、指揮者を含め、三人でどうするべきか話し合った。なにしろ、本番まで三日という切羽詰まった状況だったため非常に困難な選択だった。ここまで良い具合にクラスがまとまって二組らしさが出たのに、こんなところでくたばる訳にはいかない。リーダー達はそう感じたのだろう。その気持ちが焦りや不安、怒りに繋がって、練習でも褒めることはなく、怒るばかりだった。リーダーとその他のすれ違いが起きてしまったのだ。お互いがお互いを知らずにいた。私もリーダーなど、まとめ役は何度もやってきたから、ジャンルは違えど、リーダーの辛さや孤独、苦しみなどは痛い

ほどわかる。でも私たち指導される側もドミトリーで練習していたり、シャワーを浴びながら大熱唱したりと、人知れず努力していたのだ。このすれ違いを解決するべく、指揮者とソプラノパートリーダー立ち合いのもと、私はパートリーダーに全てを打ち明けた。リーダーの見ていない所で一生懸命に励んでいること、リーダーの辛さも十二分に分かっていうこと、成功したときは小さなことでも褒めてあげて欲しいということ、全てを伝えた時には既に涙が溢れていた。パートリーダーも泣きながら謝ってくれた。本当はドミトリーで褒めていたということも分かっていたし、お互いが気持ちを打ち明けたことで、また絆が深まり、新たな気持ちで歩み出すことが出来た。このことはアルトメンバーにも告げ、チームとして意味のある大きな一歩を踏み出すきっかけとなった。

私たちはその後、本番まで何度も何度も練習を重ね、みんなで高め合っていた。そして本番。緊張と興奮とが混ざり合い、舞台上立つ特有の妙な腹痛に襲われた。でもそれは舞台上立ったと同時にどこかへ消え、かわりに自信が心の底から湧き立つのを感じた。歌っている最中は、とにかく楽しくて、この時間が終わらないで欲しいと願った。合唱を終えて、私の中に生まれた思いは、やりきったという喜び、ただそれだけだった。結果がどうであろうと、悔いはないと思つたのだ。今までは、優勝を夢見て、優勝だけを目指していた。中三の時のあの喜びは今でもはっきりと覚えている。でも今回の合唱コンクールは、勝ち負けなんかよりも、クラスがひとつになった、皆の絆が強くなった、そして深く嫌いな私が、こんなにも勝敗を気にしなかったのは初めてかもしれない。勝ち負け以上にクラスが一致団結していたことに自分自身、感動していたのだろう。終わってほっとしたのか、クラスの成長を感じたのか、そっと涙が頬を伝った……。

写真

チャプレンより



高野主教は立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業には、様々なお話をして下さいます。

戦中戦後のころ

高野 晃一

この三学期の日曜礼拝では、立教生が小五から高三まで居るので、私が同じ年令だった戦中戦後の生活について話をしました。私は当時、現在の東松山市に住んでいて、毎朝午前六時に起き近くの広場で町内の学生と共にラジオ体操。少しでも力を抜くと太い棒でお尻を何回も殴られました。続いて一時間ばかり早足で市中幾つかの神社参拝です。その後、家に帰ってから学校に行きました。学校では朝礼があつて雨の日以外は、燃料になる松根油を取るために松の木

の根を掘りに行きました。今は「森林公園」になっている場所を当時は飛行場にするために松林を切り倒した所です。雨の日以外は毎日働くばかりで、勉強したくても本を読みたくても時間も本もありません。毎日雨が降ればよいと願っていました。夜は敵機に分からないうようにするため電気は小さく暗く、そしてよく空襲があるため、サイレンが鳴ると夜中でも急いで起きて防空壕に駆け込む日々が続きました。

昼食は普通サツマイモ一本、それでも良い方でした。たまにお米のお握りなどを持って行くと同級生に悪く、運動場の隅で知られないように食べました。この頃はよく都幾川や沼に釣りに行きました。色々な小魚が釣れたり、うなぎを取ったりして本当に美味しく、時間があれば行きました。セリなどの食べられる野草、ハチの子など害にならない物は何でも食べました。食糧不足は戦後もかなり続きました。夏休みには軍馬の餌にするため、草を刈り干して学校に持って行かなければなりません。多くの場所は遅いと皆刈られてしまふので、早起きして行くか遠くに行くかにしていました。

男子生徒は皆お国のために志願して軍隊に行くと思っていたので、十七、十八歳頃には敵と戦って戦死すると思っていました。先生から「鬼畜米英」アメリカ人やイギリス人は人間ではなく鬼だから殺しても良いと教えられていました。

ラジオ放送は毎日「我が日本軍は敵米英軍に大勝利」と放送していたのですが、その戦場は時が経てばたつほど日本に近づいて来るのです。疑いながら最後は沖繩が戦場と聞き本当ではないと思いました。当時父親は招集されて軍に派遣されてしまったので家での商いは出来ませんでした。

小六年生の夏、広島と長崎に新型爆弾が投下され甚大な被害を被ったという放送がありました。後から原子爆弾ピカドンと分かりました。後に東松山に原爆の図の「丸木美術館」が出来て丸木御夫妻が来られて住み、私も良くお伺いして話を聞き、深い関心を抱くようになりました。

そして八月十五日学校に行くと、先生から正午に天皇陛下の重大放送があるから家に帰り聞くようにということ、家族と共にラジオに向かい正座して聞きました。当初何のことか分かりませんでした。が、後で日本は戦争に負けたのだと聞きました。確かにその日以来空襲は無く夜は電気も点けられ、本当に戦争が終わったのだと実感しました。もちろんラジオ体操や神社参拝も無く、教科書はありませんが毎日教室で勉強できました。学校の図書館や先生から本を借りて、読みたくて仕方が無かった本もようやく読めるようになり、凄く嬉しかったことを覚えています。戦時中は鬼畜米英と教えていた同じ先生が、仕方の無いことで今度「米英の文化や民主主義

写真

を学び習うように」と全く逆のことを繰り返すので、私は先生に対して深い不信感を抱きました。そのころ友達にキリスト教徒が居て「東松山聖ルカ教会」に誘われて行きました。そこでイエス様は自分の命を掛けても人々を愛し、自分の思うことを決して曲げたりしない方であることを聖書や説教から知り、自分の信ずる道はこれだと思い洗礼を受けました。そしてその後暫らくしてから牧師として教会で働く決心をしました。

私の話を聞いて多くの生徒たちが、今自分たちは何と恵まれているのかと気付いたとか、やがて世界の平和のために働きたいと書いてきたのを読んで、話して本当に良かったと思いました。

メールマガジンご希望の方はホームページの

(www.rikkyo.co.uk)「メールマガジン配信登録」から登録ができます。

立教英国学院通信を電子配信に切り替えたい方は、infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk までご連絡下さい。